韓国の国史（研究/教科書）において語られる東アジア

趙珖（ソウル市史編纂委員会委員長 / 高麗大学名誉教授）

はじめに

韓国、日本、中国を含めた東北アジアにおいて、歴史をめぐる争いがいつもより厳しい状況にある。これにともなって各国では歴史教育に関する論争が強まっている。私たちは歴史教科書の内容を改めて見つめる必要がある。 東北アジアの歴史問題は自民族中心主義と国家主義的な傾向から由来する。韓国もここから自由ではない[1]。近来編纂され学校で使われた教科書、そして学界の日本関係史、中国関係史の叙述に基づいてその傾向を調べてみることする。

１．前近代中国に対する叙述

私達にとって「中国」とは空間的に今の中国の地域にいた国々を指す代名詞である。中国の歴代王朝を一つの中国として認識し、前近代において東アジアの覇者はいつも中国地域の国であったとみている。このような中国中心の世界認識が韓国史とぶつかるところは高句麗史である。教科書では「高句麗は東北アジアの覇者として君臨した。満州と韓半島にわたる強大な領土をもって政治制度を完備した大帝国を形成し、中国と対等な地位で競った」と記述している。ここで言う東北アジアは中国を除いた東北アジアなのか？「中国と対等な地位」の中国はどの国なのか？高句麗史をめぐる混乱は、隋と唐が高句麗を征服しないと真の東北アジアの覇者だと言えないので絶えず戦争を挑発し、言わばそれが高句麗滅亡の原因なのに、新羅が唐と連合して高句麗を滅亡したという叙述にもつながる。
このような歴史認識はある種の「華夷意識」に基づいている。これは北方遊牧民族に関する

[1] 以上、고영진、「한국사 교과서에서 보이는 전근대 일본」、『역사문화연구』 25、2006より引用。

叙述で赤裸々にあらわれる。高麗時代から遊牧民族は高麗を侵略しながら、時には銀を持って来て農具、食料と交換したという。そして、高麗の国力が強かったときは金国を「征伐」したといっている。彼らは征服しても構わない夷であった。
朝鮮時代の叙述では明との関係で、もう一度「先進文物の吸収を目指した文化外交」という記述が登場し、女真との関係では「懐柔と討伐の交隣策」という表現が登場する。そして清に対する説明のなかでは次のような叙述がある。「朝鮮に朝貢し、朝鮮がオランケ（夷）とみなした女真が建てた国に君臣関係を結び、屈辱的な降服をしたことは朝鮮人において大きな衝撃だった。以後、オランケにやられた恥をすすぎ、壬辰倭乱の時に助けてくれた明に対する義理を守って、清に復讐しようとする北伐運動が展開された」「清とは形式的な事大（従属）関係を結んだ」さらに清の発展を次のように説明している。「中国の伝統文化を保護、奨励し、西洋の文物まで受け入れ、文化国家としての面貌を整えていった」。オランケである女真が建てた清が漢族の文化と西洋の文明を結び、文化国家になったが、私達は形式的な事大関係を維持したという。漢族の伝統と近代の開発者である西洋の文明を吸収したが、オランケはオランケである、ということだ[2]。

２．前近代日本に対する叙述

前近代中国に関する叙述では中国という代名詞がしきりに登場するが、「日本」という用語はまれである。「倭」と「倭寇」の話が多い。本来、日本という国名は7世紀後半に登場したものである。しかし教科書では、百済は日本九州地方に「進出」し、弁韓は倭に鉄を輸出し、百済復興運動では再び倭の水軍が百済復興軍を支援したと言っている。倭と日本を区分する線が曖昧だ。
日本に渡海した韓国文化を説明するときは日本という国名だけを使っている。「三国（高句麗、百済、新羅）の文化は日本に伝播され、日本の古代文化成立と発展に大きな影響を及ぼした」というのが結論である。しかし、高麗時代になったら日本は消え、倭寇だけ登場する。倭寇に対する定義はない。倭寇の侵略の歴史だけで、日本の中央政権に対する叙述は見えない。

---

[2] 김정인、「동아시아사의 재구성 : 고등학교『국사』·『한국근·현대사』교과서를 중심으로」、『한국사회교과교육학회 학술대회지』、 2008より引用。

朝鮮時代も日本との関係は倭寇から始まる。続いている倭寇の略奪に対馬を「征伐」したという。「対馬征伐（己亥東征）」は日本から見たら侵略である。日本は侵略し、我らは討伐し進出した。―無論、「壬辰倭乱」と帝国主義日本の植民地支配は直接比較できない―「対馬征伐」の後、倭寇の要求を受け入れ、三つの浦（三浦）を開いて貿易を許可したとされている[3]。

1592年（陰暦）4月に勃発した「壬辰倭乱」（訳者注：日本では一般的に文禄·慶長の役、中国では万暦朝鮮役とよんでいる）は、朝鮮において朝鮮と明が日本と戦った戦争である。即ち三国が共有する歴史である。1945年解放後、現代の韓国学界で壬辰倭乱は日本の侵略に対する民族的な抵抗と克服という「経験の歴史」とみなされ、最も熱い関心を受けた研究分野の一つとなった。この戦争に関する研究は帝国日本の侵略による苦しみを情緒的に癒すための時代的な要求だった。対外膨張期に日本がこの戦争を侵略戦争の必然性を正当化するための道具として利用したが、韓国では植民地支配による苦痛を減らすための分野たったのである。

研究主題としては義兵たちの活動と李舜臣（イ·スンシン）の海戦の比重が大きかった。このような研究傾向は今も続いている。そして政府がまともに役割をしていない状態で、地方の士族と百姓、そして李舜臣のような英雄のおかげで戦争の克服ができたという共通する見方をもっている。彼らの活躍はもちろん歴史的な事実だが、無能な政府→日本の侵略→英雄たちによる克服という構図が必ずしも正しいとはいえない。

「長い政治·社会的な悪弊で朝鮮政府が侵略に対処できなかった」とか、「朝鮮王朝の首都陥落も間近であったが、義兵と英雄の活躍でによって耐えられた」という評価は、実に朝鮮時代の歴史書から見えた常套的な内容であった。そして、この部分だけを取ってみれば近代以来、終戦以前までの日本研究も類似な叙述をみせていた[4]。このような研究は各時代の必要によって、それぞれ違った目的で作られたが、結果的に似たようなかたちで戦争を描いていたのではないか。

---

[3] 김정인、「동아시아사의 재구성 : 고등학교『국사』·『한국근·현대사』교과서를 중심으로」、『한국사회교과교육학회 학술대회지』、 2008より引用。

[4] 日本の侵略と戦争初期の朝鮮の惨敗には対策を作らなかった朝鮮の責任もある、といった叙述は『兩朝平攘錄』『懲毖錄』『武備志』以来, このような朝鮮の明清の著作を接した以後書かれた日本の文献にも受け入れられた。[김시덕、「근세 일본의 대외전쟁 문헌군에 대하여」、『임진왜란 관련 일본 문헌 해제』、도서출판문、2010 ；金時德、『異國征伐戰記の世界: 韓半島· 琉球列島· 蝦夷地』、 笠間書院、2010このような論理は19世紀後半日本の対外膨張と侵略戦争の雰囲気のなかで作られた著述に利用された。そして、1945年解放以後の韓国学界はこの叙述を再生産してきた。

一部の研究者はこのような見方の持つ問題を指摘し、対案を提示したこともある[5]。しかし、こういう研究も、依然として、韓国の壬辰倭乱史研究が勝利と敗北、善と悪を論じなくてはならないという観念から完全に脱皮することが難しかったことが分かる。

一方、韓国の壬辰倭乱史研究の傾向は、講和交渉に注目していなかった。 講和交渉に触れるとしても、豊臣秀吉の無理な要求と、これを全然反映していない明の日本国王冊封の間の間隙を埋めるための欺瞞と失敗として書かれるだけだった。 講和交渉は戦争についての有用な説明道具として使えるし、それから進んで、当時の東アジアのダイナミズムを把握するための道具としても利用できるにもかかわらず、そのような機会を得た研究はなかった。

講和交渉がこのように度外視された理由は何なのか。韓国では「国難克服史」という解放後の研究傾向のさなかで、朝鮮が一方的に敗北したのではないということが強調され、朝鮮が参与できなかった、そして復讐戦を妨害した交渉に対する認識は否定的だった。2次世界大戦後、日本では戦争に関する否定的な認識、侵略戦に対する反省の雰囲気を反映した研究が行われたが、 講和交渉の研究は相変わらず退けられた。韓国と日本、両国の学界は、人々が求める戦争のかたちと違う叙述をはばかり、講和交渉に関連する多くの史料は、研究者の目を引かなくなった。

一方、壬辰倭乱の研究において、朝鮮と明の関係は、だいたい明の参戦目的を「日本軍の侵略を朝鮮領土で阻止し、自国の領土を守ることにあった」ことを強調し、朝鮮に自国の利害論理を強いた明と、被害を受け抵抗しようとした朝鮮という構図の上で叙述された[6]。

韓国の東アジア史教科書では国史教科書と違って壬辰倭乱を壬辰戦争、丙子胡亂を丙子戦争と書いている。名称の違いは教育目標の違いのためである。東アジア史教科書は「葛藤解消と平和追求」を究極的な目標としている。しかし、実際にその内容を読むと、平和に関するところはよくみえない。その理由は教育課程の成就基準と執筆基準にある。基準では戦争の原因よりは戦争の影響に対する理解を、戦争の影響では文化的側面においての戦争の肯定的な影響を学習することが提示されたからである。東アジア史教育課程は、前近代史においては東アジア地域の文化的な同質性が形成し持続されることを、近現代史においては現代の葛藤を解消することにあるとされている。今後改訂される教育課程では、「17世紀を前後にし

---

[5] 許善道、「壬辰倭亂論 –올바르고 새로운 認識–」、『千寛宇先生還曆紀念 韓國史學論叢』、正音文化社、1985；崔永禧、「壬辰倭亂의 再照明」、『國史館論叢』 30、 1991；崔永禧、「壬辰倭亂에 대한 理解의 問題點」、『韓國史論』 22、 國史編纂委員會、 1992；崔永禧、「壬辰倭亂에 대한 몇 가지 意見」、『南冥學研究』 7、1998

[6] 김경태,「임진전쟁기 강화교섭 연구」, 고려대학교 박사학위논문, 2014

た時期、東アジアで戦争が起こった原因と影響を、国際関係と各国の政治社会の状況を踏まえた説明する」と、その目標を修正することが必要だと思っている[7]。
国史教科書で朝鮮通信使に関する部分は次のような叙述されている。「徳川幕府は経済的な困難を解決し先進文物を受けるため、朝鮮に国交再開を要請した」「日本は朝鮮の先進文物を受け入れ、将軍が代わる時、その権威を国際的に認めてもらうため、朝鮮に使節の派遣を要請した」相変わらず、日本は朝鮮の先進文化を求める存在として記述されている。しかし、このような叙述は17世紀以後日本が平和と安定のなかで発展したという記述と衝突する。それにつながる近代史においては日本の発展を「19世紀に西洋の列強と妥協し積極的な近代化政策を推進した結果、帝国主義列強に伍することができた」といっている[8]。

全体的に教科書でみる前近代日本は、文化後進国としての先進文化の受益者、そして侵略者の姿である。そしてこのような認識は近現代の認識につながる。 前近代日本の受益者、侵略者としての姿は一面的に妥当だが、正確ではない。日本を一つのまともな関係主体としてみなさない国史教科書の認識は、韓国をめぐる現在の様々な難題を解決し、正しい韓国―日本関係を作るのに役に立つとは思えない。望ましい叙述は、過去の歴史がそうであったように、一国史ではなく、東アジア全体の広い視野から書かれる必要がある。これからはヨーロッパの国際歴史教科書協力運動を模範に、三国の学者、教師、市民が集めている歴史教科書をめぐる交流と協力活動を、どのような困難があってももっと活性化する必要がある[9]。

3. 近代東アジアに対する叙述

高校の国史教科書のみならず、韓国近現代史の教科書では中国と日本の近現代史に関する内容はほぼ出て来ない。19世紀以後の東アジアは、一国の状況のみで自国史を述べること自体が不可能であるほどに、三国の歴史がお互いに絡み合っている。ところが、教科書ではこのような歴史の現実を気に留めることなく、「ナルシシズム」的な観点から叙述されるように

---

[7] 차미희,「고등학교 『동아시아사』 의 《17세기 전후 동아시아 전쟁》 분석」, 『한국사학보』56, 2014
[8] 김정인、「동아시아사의 재구성 : 고등학교『국사』·『한국근·현대사』교과서를 중심으로」、『한국사회교과교육학회 학술대회지』、2008
[9] 고영진、「한국사 교과서에서 보이는 전근대 일본」、 『역사문화연구』25、2006

みえる。

日朝修好条規を始めとして海外へ門戸を開放し、壬午軍乱の当時に清国へ援兵を求めた過程から始まった韓国の近代史は、日本と清国という相手の対応がどのような「事情」から出たものかについて詳細に言及していない。我が国の歴史現実と関わりがある彼らの対応だけを現状的に並べているわけである。朝鮮が日本の植民地に転落したのに、なぜ日本が大韓帝國を植民地化しようとしたかについて、そして中国の満州が独立運動の基地としての役割を果たしたが、如何して他国の中で独立運動が可能になったかについて、詳しく説明してくれない。

日本が持っている性格が植民地の原因であり、植民統治を通じて遺憾なくそれが再現されたという前提の下で、現状的な植民支配とそれに対する韓国民の抵抗が主に強調されてきた。相手が日本であるから、日本をもう知る必要はないという意識が敷かれているのである。現代史の叙述にも、日本とは異なり、中国は独立運動の基地ながら、活動の支援勢力であったというイメージだけが繰り広げられ、東アジア史で韓国の存在が顧みられない近代史と事情がほぼ同じように見える。

1945年以来、韓国（北朝鮮を含む）と日中の間では、「断絶」の歴史が持続され、今もまだ繋がれることがない域内の関係がある。そして、米国が東アジアの現実に深く介入しているが、これに対する叙述は全然足りないにも拘らず、内部政治や経済や社会に関する説明だけが溢れている。世界の多くの国々の世界史の教育で代表的な国際戦争として挙げられる朝鮮戦争の場合も、それに参戦した各国の論理が紹介されていない。米国、ソ連、中国はもちろん、他の国々の参戦と介入については、相変わらず説明が足りない嫌いがある。他の時期よりも近現代史の場合、中国史のみならず、日本史と連結して説明することによって、脈略を理解できるようになる。だが、このような問題意識、言い換えれば、東アジアという観点が既存の歴史教育にはなかった。自分を読むことも重要な仕事であるが、如何に他人を読めばよいのかという問題も、私を省みさせる準拠になる[10]。

これから編纂される歴史教科書は、中国と日本を含む東北アジアの周辺に位置する国々に対する叙述が、人類の普遍的な価値を目指し、お互いの理解と協力を増進する方向で行われる必要があると思う。

---

[10]고영진、「한국사 교과서에서 보이는 전근대 일본」、『역사문화연구』25、2006